

シベリア抑留を告白の理由

愛媛県 山本 繁夫

太平洋戦争が終わってから七、八年経った頃、ラジオの連続ドラマで「君の名は」という有名な放送と映画がありました。戦時中の若い男女の悲恋の物語でしたか、タイトルに「忘却とは忘れ去ることなり」と大きく掲げられておりましたがまさに「シベリア抑留」は「君の名は」と同列には参りません。忘却したくて忘れ去ることのできない大事件だと思えます。単に六十二万の抑留体験者のみに限らず、中国東北部で生活していた居留民と農耕と食糧増産に携わっていた開拓団関係の方々など百万人の方々の筆舌に尽くし難い苦難と多数の犠牲者に対して哀悼の誠を捧げて安らかに成仏され眠って下さい、と申し上げることで済むことでしょうか？ 戦時中のことならば何をしても良い。東京・大阪・名古屋をはじめ全国の都市

の破壊と焼き払い、広島・長崎の原爆の洗礼をはじめ負け戦には勝者以上の悲しみを受けねばならなかったのである。敗戦後のポツダム宣言という当時の最大最高の申し合わせ、国際条約を踏みにじったシベリア抑留は人道大許し難いことである。軍隊の軍に之（しんにょう）をつけるは運隊となる。正に軍隊は運隊であった。私の従兄弟の中の男子、七人が昭和十七年（一九四二）から二十年にかけて、当時の満州国にいたが、一人は主計少尉で三年、満州にいて十九年に内地へ転勤、一人は昭和十六年一月から二十年四月まで満州で兵隊の衛生兵として勤めていたが自分の部隊からメレヨン島と沖縄へ主力が移動したのに彼ら少数は虎林に残り昭和二十年五月、四国に戻り、四カ月して九月には故郷へ馬に分け前の毛布多数と衣類を積んで帰った。一人は終戦時南朝鮮の済州島に兵隊としていたが昭和二十年十月、引揚途中尾道と今治港の連絡船に定員の三倍も乗船した「東予丸」が沈んで多数の者と共に死んだ。あとの四人が満

州から入ソして抑留されたが四人共昭和二十三年に無事に帰って来た。祖母が孫たち七人、満州から帰ってこない四人のことを案じながら昭和二十二年に亡くなった。個人的な勝手なことを記したが事実ですからお許しを願いたい。私は抑留中からも帰国してからも、関東軍司令官以下幹部の民間人に対する対策、七十万人の軍隊の運命をどんなに思っていたのか、全く無策な統率力を惜しむと共に昭和二十年二月のヤルタ会談によるスターリンとルーズベルトの二人の肚の中にある戦後処理の駆け引きを見ても、スターリンの常人では考えられない非凡な作戦には二の句がつけられないものがある。本当に四十年前の日露戦争の報復以外に何ものでもなく、火事場泥棒的侵略主義は北海道を狙う虎視眈々の姿勢であった。一部を除いて、僅か一週間ばかりの戦争はポツダム宣言受諾により八月十五日に幕切れしたが余韻は大きかった。私の所属していた部隊重砲兵第三連隊は、入隊した昭和二十年二月十五日には東滿總省の下城子

駅の南の丘陵部で駅から徒歩で一時間、車で迂回して二十分の所でした。東隣に牡丹江重砲兵連隊（長嶺頼哲三大佐）で、その中間の奥に牽引車中隊（第十二中隊）がありました。二六一〇部隊は二十年四月二十二日に下城子を出発して五月二日博多へ上陸、五七軍に入り宮崎県に移駐してしまつた。昭和二十年四月二十九日（祝日）に三軍から命令で、夕方私たち初年兵四人はトラックで下城子駅に向かった。午前中か午後の間に各中隊は火砲を牽引車中隊がいなくなったので古年兵が人力で四キロの道路を曳き、砲身だけでも五トン、総重量三十三トンを輓曳した。その外、器材・弾丸は後日、陣地までの道路ができ次第、運ぶこととして火砲は凶們から傑満屯を経て三洞屯までの五メートル幅の道路構築作業の進展に伴い、随時輸送された。五月、六月、七月の三カ月間は道路作業と七月から各中隊の砲の裾付けの陣地構築作業に炎天下終日土方作業である。毎朝鍛工兵により打ち直された十字鋏各自二本と円匙と昼めし、

水筒の軽装で百日間の土方の明け暮れでした。あまり雨に合った作業の日の記憶はございません。

下城子時代の二月下旬と三月、四月は本当に軍隊の基礎教育にしがかれ鍛えられました。幸いに中隊長、教官、助教の古年兵、伍長、内務班の班長さん（兜森庄二氏三年兵、伍長、秋田県生存）も立派な人でした。教官も佐川少尉、丸柱見習士官も本当にやさしい立派な武人で、初年兵を大事に大事に教育を下さいました。が戦局の推移か、琿春地区に野砲連隊が新設され、五月一日付けで初年兵も当初四百人入隊したものの、百三十六人位と古年兵四十人位の四百人位が転属しましたが、その時飛松伸三大佐は「この度の移動は転属ではなく派遣であり、また原隊に戻ってくる」という意味の訓示があつておかしなことを申されたなあと思つた。入隊当時の部隊の定員千二百八人が七百人と五百人も減っていた。下城子の元の兵舎に白井少尉以下三十人が留守部隊として、他に教育で出張したり、昭和二十年五月十二日に部隊長、

飛松大佐は済州島へ栄転し、後任に新京野戦兵器廠から転任されたが、道路構築中のためか我々兵隊には知らされず命課布達式もあつたのかなかつたのか判らない。また、四月末に下城湖子を出るまではおられた筈の岩下弥作少佐一大隊長（大分県）はじめ一大隊本部の瀬岡宗三郎中尉（和歌山県）、幹候八期教官佐川秀雄少尉（兵庫県）、丸柱作平見習士官（香川県）もいつの間にか顔が見られなかつた。一兵士であつた私たちには全然知らされず、各中隊の陸士出の将校や幹候の一部は本土防衛のため内地へ転任になり、各中隊長は四人とも幹候五期の英才ばかりが留任されて、各中隊共に曹長、軍曹クラスの方々は下城子時代と同じであつた。

そんな時、私たち初年兵も五カ月の教育終了で一期の検閲が終わつたらしい噂があり、六月下旬、待望の幹候の試験があり、同年兵の琿春転属の受験者も横越仁門軍曹（富山県）の引率で三十人位来て三カ月ぶりに再会して嬉しかった。試験の結

果は七月上旬にあり、合格、同日上等兵に進級して誰かに申告したことは覚えていたが今となって、どなたに『陸軍二等兵山本繁夫は本日付けを以て陸軍兵科幹部候補生に採用され、陸軍上等兵を命ぜられました、茲に謹んで申告致します』と言ったのか。本当に自分としては念願の日で心中は嬉しかったが他人には嬉しい顔を見せることもなかった。このとき一大隊本部からは藤田健一君（徳島県）、中平純郎君（高知県）との三人であった。ただ私の一大本部は既に大隊長、指揮部長、将校もおらず川島軍曹が一番先任で半年前まで一四一人の定員が三十人で一大隊本部という所属には変わらなかった。七月の中頃か、川島軍曹が私に「貴方は幹候の学校を出て将校になってもこの部隊に戻ってくる方だから、古年兵に負けぬよう、しっかり勉強して欲しい、そのためには夜は消灯後も何時まで起きていてもよいし、朝も起床前、何時に起きてもいいからとにかく、しっかり勉強して下さいよ」と懇々と諭すように念を押された。私

は所詮^{しよせん}、初年兵、どんなに逆立ちしても二年兵、三年兵には勝てないし、まして、四年兵、五年兵殿に勝つことはできないのにどうしてと。あとから判ったことは川島光春軍曹は私に「山本さん、あなたは近々九月頃新京か東京の学校へ行くようになるからしっかり勉強（学科）して下さい」と重ねて言われた。

軍隊という所は将校は定員以外は、不要でいくら幹候に通っても自分の出身部隊即ち原隊に帰ってこられるのはほんの二人か三人も戻ればよいということは判っていた。私は果して自分が何番で合格したかは中隊の誰からも教えて貰えなかったがシベリアから復員後故郷で戦友の二中隊の三好清一氏から「君が幹候の試験で部隊で一番で、二中隊のため実君が二番らしいと近衛文隆中隊長が二中隊の幹候合格者に話した」と当時のことを聞き、他所の中隊では中隊長がいつて、そんなことが判ったのに、自分の中隊は将校が一人もいなくて川島美夫軍曹が先任であったことも戦後知っ

た位でした。しかし、その頃のソ満国境の空気は重苦しく内地の方も空襲で大分痛めつけられ、沖繩も陥落したらしい。陸海の特攻隊が活躍しているが、いざれ本土決戦となる日が間近なことが体に感じられる頃でした。

七月の中旬か下旬だったか火砲据付の土方作業が一中隊に応援作業に私の中隊からも二十人位に一中隊の古年兵と作業の小休止の僅かなとき、古年兵四、五人がひそひそと人目をばばかって「ソ連がいつ頃出てくるだろうか」の話題でした。私はそれとなくソツと聞き耳を立てて聞いていますと「来年の春だ」という声と「今年の九月か十月頃だろう」という声で自分はびっくりしたが判らなかつた。私たちの駐屯していた傑満屯と三洞屯は朝鮮人の民家が二十戸ばかりの小さい村であったが、ひよっとしたらその辺りから情報が入ったのかも判らない。

八月九日の朝も起床六時の前、四時半から起きて下士官で勉強していると五時頃、双葉の中型の

爆撃機のような飛行機が幕舎の低空を飛び去ったがハッキリとソ連の飛行機とは分ならず、不寝番も平常通り六時起床で、朝食後、平常通り、陣地構築の個所で作業しているとき百メートル位先の方から将校が馬を飛ばしてとんで来た。二中隊長近衛文隆中尉である。馬上から「今朝ソ連が全面的に攻め込んで来た、一旦作業を中止して幕舎を完全に擬装してから作業をするように」と叫び馬を走らせた。これは私も近くにいたのでよく聞こえた。午後私は陣地へは行かず誰からかの命令で五年兵の近藤義一兵長と二人して有線電話線を戦闘指揮所と各中隊の砲側まで八門との連絡通信線を張るため山道を六日間上り下りをした。十五キロの重量ある通信線を三巻を完全武装で九日から十四日まで五日半従事。真夏の二十八度位の小銃、鉄兜、防毒面、小銃弾前後と手榴弾二個入り昼食の雑嚢は重かったが、若かったのか格別きついとも思わなかつた。五日半ずつと一緒であった近藤義一兵長（愛知県）は小休止のとき「お前は元氣

じやのう」「しんどいことないのか」と労うと共に戦争が終わったら愛知の俺の家へ遊びにこいやと言つて下さった。後述するが朝鮮を南へ逃げたらしいけれど遂に内地へは帰つて来られなかつた。

八月十四日夕食後、川島軍曹と呼ばれ明朝の朝食後、直ちに連隊本部の戦闘指揮所の部隊長の下へ行つてくれと命令を受けました。演習ではない実戦の最中に連隊本部の古年兵でもない一大隊本部の初年兵がなぜ、戦闘指揮所の部隊長の下へ行かされるのか不思議に思つた。以下平成四（一九九二）年に刊行された「阿城重砲兵舎連隊史」に掲載された「重砲兵第三連隊最後の日」を記す。

「重砲連隊最後の日」

第二次大戦の最後に玉音放送終了後直ちに「演習終わり」のラッパ吹奏で戦闘行為を停止した部隊は、全関東軍中唯一の部隊それは我が重砲兵第三連隊である。

八月十五日早朝東満、凶門西方高地に布陣して

いた三連隊の戦闘指揮所では連隊長・副官ら六人が緊迫した空気の中で、内地のラジオにより阿南陸軍大臣の割腹自殺の知らせのあと正午より重大放送があると予告されていた。ソ連軍が数十キロ先まで来ていて琿春地区では激戦が繰り返され我々の火砲が火を吹くのも今日か明日かという状況の中、嵐の前の静けさの数時間を経て雑音の多い聞きとりにくい初めて聞く玉音、陛下の終戦の大詔が放送された。時間にして一分間か二分間、沈黙していた連隊長の口から「ラッパ手、演習終わりのラッパを吹け」と命令され北・東・南と四ヶ中隊の砲列の方角に向けて吹奏された。それからまた一分か二分後に連隊長は静かに落ち着いて「副官、兵に酒・煙草・甘味品を全部配給しなさい」と命令され、数分後に戦闘指揮所は解散となった。僅か五分そこそこの時間、明治・大正・昭和と五十年の年月幾多の先輩が血を流し守り続けて来た満州の大地、灼熱の太陽の下、砲煙も無く爆音も無く誠に静かに栄光ある重砲兵第三連隊は

任務を完了したのである。

飛松大佐の後任として四月に着任したばかりの平岡中佐は、物静かな温厚な方のように見えたが、熟慮した末やや上ずったヒステリックな甲高い声で前記の「ラッパ手、演習終わりを吹け」となったのである。この命令一言で連隊七百人の命は全員無事守られた。二日おいて八月十八日囃門の街へ集結するときも途中最後の陣地に全員が集めたとき、兵に永年の苦勞をねぎらい、今後はすぐ内地へは帰らず恐らく入ソして労働につくと思いますが、団結して無事に帰国するようにと最後の訓示を賜り、その後将校団と別行動をして二、三年後に全員無事帰国したが、若干の者が彼の地で亡くなられたことは痛恨に耐えない。

今となって静かに当時のことを偲ぶと連隊長のたった態度は立派だったと思われるのである。今は亡き部隊長や諸先輩、同年兵の御冥福をお祈りして合掌いたします」。

山上の戦闘指揮所は東方に囃門の街を見下ろす丘陵の高台のような地形でちょうど三十坪の広さ

で、平岡正夫中佐部隊長の御側には副官を勤めておられた植松卯八大尉（山梨県健在）と無線担当の下士官、有線電話担当の下士官と私山本候補生（上等兵）の六人であった。後日植松様にお尋ねしましたところ、山下軍医・山田主計らは「ひる」で指揮所におられなかったとのことでした。朝、七時のJ O A K（東京）の短波放送で阿南陸軍大臣の後任に下村定大將が就任されたことや、正午の大元帥陛下の玉音放送は連隊の高級幹部と各中隊長は勿論部隊の七百人も午後二時過ぎまで知らなかった。

私は八月十五日正午の大元帥陛下の御言葉の終了した時点でこれで戦争は終わったが半年前の二月十四日朝、町内の皆様の前で「山本繁夫は今日これで皆様とお別れでございます。軍務につきま

す以上は死を覚悟しておりますので今度皆様にお会いできるときは白木の箱に入って帰る覚悟でこ

「ございます」と言った言葉が昨日のように思い出されたと同時に、内地にいた時が入隊してからは思い出せませんでした。かなり以前から日支事変で捕虜となった中国兵をソ満国境の日本側陣地やトーチカの構築のため、五年も六年も使役として労役につけて陣地が完成と同時に釈放され中国へ帰った者もいるが大半の人が銃殺された噂を思い出し、自分もこの負け戦によってすぐ内地へは帰りたくない。近所の人に張り切って決意を述べて渡満したのに半年位で帰国したのではテレ臭いより恥かしい思いが先で、否、それよりすんなりと日本へ帰国は無理で恐らくソ満国境のロシアへ連れて行かれて五、六年は賠償というか捕虜として苦役に従うと覚悟していた。八月十七日に武装解除して八月十八日午前八時に各自毛布を携行して陣地のほぼ中央にある広場に集合した。この日は晴天で風もなく朝からも蒸し暑い日であった。

植松卯八部隊副官の回想による

連隊長は、集合した連隊将兵に対し次の要旨の最後の訓示をした。

「今度の戦争では、今日まで大変ご苦労をおかけしたが、残念にも一発も射たない中に戦いは敗戦で終わった。連隊は人命により、今からソ連軍に降伏のため、凶們に向かう、これからも多くの苦難があると思うが、お粥を吸っても身体だけは、お互いに充分気をつけ合って、晴れて日本の土を踏むまで頑張ってもらいたい。なお、日本に帰還した暁には、本土復興のために一層の力を尽くされることを望みます」と。

自分は八月十五日正午の玉音放送の直後と八月十八日午前八時の部隊長の最後の訓示の中で、ソ連のために苦役に就かされるかも分からないと部隊長は訓示した。八月十八日起床後、私と中平候補生（高知県）、越智一等兵、細川一等兵、吉田一等兵、吉弘一等兵の六人で山麓の炊事へめし上げに行つて、山の中腹の幕舎へ三十人分の食事を運

んだところ、一大隊本部の下士官・兵は私たちの六人以外一人もない。各幕舎を覗くと誰もいない。幕舎の中は取り散らかして、慌てふためいて出て行ったような形跡、小銃と帯剣は残っていないがかなりの私物らしいものは残っていた。土面に手紙とか典範令などを燃やしたあとがあるが火は消えていた。六人が手分けして、辺りをいくら探しても見当たらない。八時集合までに時間はない、自分たちだけでめし上げの朝食を飲み込んで、一中隊の蒲敏勝曹長（愛知県）の下に駆け込み事情を説明、一中隊に面倒をみて欲しいと申告しますと蒲曹長は、止むを得ん仕方ない今日から一中隊へ入れと許可して下さった。それから帰国まで三年間お世話になった。

八月十八日図們市内でソ連軍の管理下に入って綺麗に清掃された満鉄男子独身寮は幕府に明け渡した赤穂城を思い出し入室した。翌日暇を見て所内を散歩していると塀に沿って背の高いひまわりが大輪の花を真夏の太陽に向かって咲く男らしさ

に、この三、四日の憂愁を吹き飛ばしてくれた。図們から間島（延吉）へ、九月上旬間島編成第七作業大隊として、我が部隊の連隊本部、一中隊、段列と私ら六人は七大隊四中隊に編入して入ソのため再び図們を経て琿春を通りすぎソ領クラスキー村へ入ったのが九月半ばの頃でした。二百キロ近い行程をダバイ、ダバイと追われ千人の部隊をソ軍のカンボーイ（警戒兵）は全部で二十人位の少人数で、日本兵はおとなしく東京ダモイにだまされて昼夜を問わず、僅かな小休止をはさみながら黙々と歩いた。下痢や体調を崩し食糧不足の行軍、雨中の仮眠と不規則な苛酷な行軍であった。途中惨憺たる戦死者や死馬の悪臭は二キロ位手前から鼻をつく悪臭で死体の存在が分かる程であった。一大隊本部員であった私たちは今日から捨て児のようによその中隊へ貰われていった。抑留体験者の大半が混成の収容所生活を見ず知らずの日本人たちと擦れ違いのように転々と移動したほどではなかったが。川島・阿部・岡山軍曹、大岩・

太田・兜森・佐藤伍長・最上等兵、戸田上等兵などどこへ行つたのか？

三週間位した九月十日頃、延吉收容所の別棟で偶然藤田候補生に会った。あの朝、彼は私たちめし上げ班と共にしないで古年兵と一緒に白頭山で籠城してソ軍に抵抗するつもりで二十三人で出発したが正午前に私たち六人のことを忘れていて川島軍曹が、自分が一人で迎えにゆくと言ったが皆に止められたと戦後五十年経ってから聞いた。これが運命を大きく分けて、二十三人の内、生きて内地へ帰れたのは半数程で日ソ戦の初め六日間私と延線作業をした近藤義一兵長もついに帰られなかった。私たち残された六人も私と三人が帰ったのみで中平純一候補生（高知県）と越智清一等候兵（下土候補・愛媛県）も内地へ二度と帰ることができず、コムソモリスクで白樺の肥やしになつてしまった。合掌、私は戦友のこの二人を残して帰ったことが五十八年以上経った今日でも後ろ髪を引かれる思いで生きている。

平成十六年八月下旬、財団法人全国強制抑留者協会主催のシベリア慰霊墓参団ハバロフスクA班に参加させて頂いて八月二十六日、コムソモリスク五分所を尋ねることができたが、当時は郊外の淋しい広野に在った收容所も今は建物はすっかり跡形もなく綺麗に整地され、北側の一部はガレージになって大通りに面した一流住宅地となり周囲は七・八階建ての住宅団地となっていた。

昭和二十一年一月一日、元日の朝八時半、使役に出ると言われ、他中隊からの見知らぬ若年兵、私と同郷の年恰好の二人は衛兵所前に用意された馬櫓二台で死体安置室に井桁に積まれた冷凍死体二百体の内の約半数を昼食抜きで警戒兵に早く早くと急がされてうす暗くなった四時前、收容所から西北一・五キロの低い丘へ一回に七体位ずつ載せて七回往復、一人が五十体、二人で百体埋葬した。慰霊の際は、墓地へ是非とも行きたいと思つたが現地の方が道路がなくてとても行ける所ではないと断られて行けなかったが、いつか何とかし

て埋葬地へお詣りしたいと思っています。

しかし、コムソモリスクの五分所へ昭和二十年十月七日に入所して昭和二十三年五月十日まで他の収容所に移動することがなくて幸せであった。

七大隊千人と先に五百人程いて千五百人の収容所でした。

昭和二十年十月下旬頃から本格的な強制労働が始まった。今までに沢山の抑留体験者が既に語っておられるごとく、食糧の絶対量の不足と質の低下。防寒に対する服装の不足、保健・衛生設備の不備、居住室の粗悪の上に立つての重労働、そしてその上に辛い辛い夜間作業。昼間の酷寒の中の作業を終えて、貧しく淋しく夕食を短時間で終え、八時半すぎから綿のごとく疲れた体を横にウトウトした午後九時過ぎ、本部の当番兵が「夜間作業二十人出る」、「大至急本部前に集合せよ」、「九時半整列!!」とか怒鳴り声が聞こえて起こされる。初めに述べたように私たち六人の一大隊本部員は六人だけ一中隊の継子扱いを受けて、休日

の使役や夜間作業の要員には決まって指名されて来たので、馴れてきてから収容所内の小隊長や班長のお名前は生存者もいるので出せないが私の六人グループが専門であるが六人のうち三人が初年兵、万年初年兵。残りの三人は三年兵の兵長と初老の召集兵で多少遠慮したのか免れることもあった。誰だって、戦争が終わっても自分の中隊の初年兵は可愛い。できることなら他所の中隊、即ち大隊本部の初年兵を常時、使役要員として、また夜間作業要員として一任すればよいとお考えでしょう。そんなことが重なって中平候補生、越智一等兵は私の部隊出身者の中では一番早く死んでいった。

収容所生活の初め頃、あまりの辛さに誠に申し訳ないことであるが自分の御先祖様が昔、何か世間様に対して悪いことをされた報いが私に当たって、こんな目に合っているのではないかと思つたが、私の両親は二人共真面目で人格者で近所の方々、親戚・兄弟から尊敬されていた。また祖父

も祖母も四人のうち、三人の祖父母をうすうす知っていたが善人で、近所隣、親戚でも親のように慕われていたことを知っています。

両親と祖父母以前の御先祖様の記憶はないが、いずれの方も立派な人と信じられると思う家柄であるから決してそういう因果応報ではないことは自分自身が認める事である。抑留者の皆さんが述べておられるように渡り鳥がシベリアから南の国、日本の方へ飛んでいる姿を見て、この時だけは誰しも鳥になりたいと願ったものである。ただ、告白しにくい事がある。

それは戦後一カ月経ってから入ソするに当たっても、未だ自分は兵隊のつもりでいたし、二カ月前になつたばかりの幹部候補生に未練というかこだわりがあった。それは自分は上官から「シベリアへ行って何年か兵要地誌作成のための出張を命ぜり」という命令を受領したのだ、シベリアの気候、気温、地形・地物・河川・湖、土質、動物、植物、食事、住居、衣類（特に防寒具）、輸送・燃料、屋

外の作業、耐寒訓練、兵器など広範囲に亘って、体験して調査報告書を作成するよう指示があったと自分に言い含めて納得したが、それ程移動もできずコムソモリスク市内の飛行機工場、煉瓦工場、建設現場、上水道、下水道、採炭、鉄道の路盤造り、ボイラー、農場位の平和産業が殆どで実際の飛行機の製作工場へは入っていないし、潜水艦の造船所もどこにあるかも知らない、行ってない。苦し紛れに色々なこと考えたのであろう。

昭和二十一年二月か、寒い夜だった。夜間作業の第四カントーラの四階建煉瓦積みだった。午後十時から朝の五時までの予定で、A班二十人は山田安光伍長（連隊本部・静岡県）が作業班長で、B班は自分が作業班長でやはり二十人の二班四十人で屋外作業四十分、作業小屋の休憩二十分の繰り返しでとても気温の低い零下三〇度以下でソ連の警戒兵もあまりの寒さに屋外へ出ず、ずっと小屋にいた。三回目の休憩時間午前零時四十分、小屋へ入って人員点呼をすればA班山田伍長の班が

十九人しかいない。警戒兵は心配して必死になって屋外の作業現場を隈なく探す。その間、私たちが日本兵は小屋で待機、小屋の中で焚火をどんどん燃すが火の前で暑く、背中は凍えるように寒い。ソ連の警戒兵、A B班の二人が懸命に探すも遂に判らず一時半頃、あきらめたのか収容所へ帰って指示を仰ぐためか、作業中止で収容所へ帰り、私から日本兵は中止になって喜んで就寝することができた。しかし作業班長の山田伍長と自分は昼間、作業に出ず待機して、G・P・Uの取調べを受けることになった。逃亡者はA班であり、山田伍長が責任者となる筈が一緒の作業だから山本も同じように責任者で二人の責任者が計画・共謀して逃がしたのであると、G・P・Uは問責し、正直に白状せよと言う。白状せねばお前らも処罰し、日本へ帰るのが遅くなると言う。どうも自分より山田伍長が絞られる（取調時間）のが長いが、山田班長が私が逃したようにG・P・Uは言っ私を畏にかける。逃亡した人の名前も顔も知らないし、

他の作業隊員も知らない者ばかりで、体位二級か三級の弱そうな弱年兵だけであった。結果一カ月位、毎日のように作業から帰ったら調べ室へ呼ばれて憂鬱であった。それから顔馴染みになったのか作業からの帰りを窓から見ている視線が合うと必ず当番が呼びにきて、近況報告をせよと言う。前職者でもない私には叩いてもほこりは出ないし、経験もない。子供みたいな者を相手にして時間をもてあましていたのだろうと思った。

昭和二十一年の春頃から日本新聞が初めて来て、広島原爆の報道があり、広島は百年、草木が生えぬと言われていたし、天皇陛下が人間になられたというニュースも知ることができた。

その頃所内に宣伝部というものができて日本人の矢部さんと立神さんが世話人であった。二人共、自分の部隊ではなく野重二〇Rか羅南山砲の方かどちらかだと思った。二人共温厚な人でインテリか作業免除で所内によくいた。昭和二十一年秋、きのこが美味しい頃だった、まだ我々も相変わら

ずの食糧不足で食う物もなく働かされていたが伐採作業で林の中へ入るときのこが沢山できている。作業の間を見て雪を飯盒で熱湯にしてきのこを煮て食べると上等のカマボコを食べるようで歯当たり、口当たりがよく美味しく腹持ちよく満腹感を得る。

ただし、消化は悪いのか胃が弱っていたのか尾籠な話で失礼だが、歯で噛んだままの物がそのまま出ているのである。昭和二十一年十月頃、飯盒いっぱいきのこを煮てお土産として所内に持ち帰り、作業本部の青山八郎さんに、とても美味しいものです、召し上がって下さい、と差し上げたところ、自分は所内の炊事から一袋のご飯と副食をとって不自由なのに、私の誠意を汲んで下さったのか数日して「山本、明日から作業本部へ来て計算係になれ」と言われました。その後本部の責任者は田辺義雄少尉でした。この方は他所の部隊の方で富山県人らしかったが割合、やさしい人で仕事の切れる人でした。昭和二十八年頃、上京

した時、青山の内閣調査室の調査官をしておられ、炊事の臼井伝五郎軍曹と三人で四谷荒木町で一夕共にして旧交を温めました。青山八郎さんのお陰でソ連将校ペトロフ上級中尉が人事を担当していたのでそちらの仕事を手伝うことになりました。

私はペトロフさんからロシア語の会話と字の書き方、取り敢えず日本人の氏名、階級、兵科、生年月日、日本の県、市、町村、番地、父の名、母の名、兄弟の名、職業、家柄、財産などロシア語で書くことを教えて下さった。それは誠に真剣な態度で寺子屋式教育を思い出した。

草地貞吾回想録の一一九頁に二重柵の收容所の二カ月弱と題する非常に短い記事がある通り。

昭和二十三年一月十六日から三月八日の四十二日しかいなかった。ちようど前年の十一月か十二月から三カ月間、記憶が大分うすれて正確ではないと思うが、第十四分所の中に一区制、仕切られた兵舎に二部屋か三部屋の教室で二十人位ずつで合計六十人足らずのコムソモリスクにおけるハバ

ロフスク地方講習会に参加して、五分所へ帰って間もなくのことだから二月下旬頃と推察される、三大隊の兵舎を有刺鉄線で取り囲み関係者以外は勝手に入れなかった。将校だけ二百人で中尉から大佐位までの階級で若手少尉や将官は一人もいなかった。

五分所のロシア人将校、人事係のペトロフ上級中尉と山本の二人で兵舎へ入ってまずびっくりした。大部屋で四十人、五十人が真冬の二月に真っ赤に焼けたペーチカのお陰で全員上半身シャツ姿が多かった。一部上衣着用者もいたがシャツでは階級が判らなかった。この時はペトロフさんが片言の日本語で質問して、主として自分が将校の氏名と階級と本籍地の三つか四つ問い記録するに留まり、一時間半か二時間ほどであった。二百人の中に二人だけ愛媛県松山市の土居田町と余戸町から海軍大佐と陸軍大佐の二人に会って質問したがすぐ氏名を忘れて、自分が帰国した昭和二十三年秋にも僅か六キロか八キロの所を訪ねることな

かった。階級があまりにも隔たりがあったからか。勿論、草地さんにも会った筈だが当時は全然関係のない人で全然記憶にはない。この人達の五分所の出入は夜間の行動かどちらも知らなかった。ハバロフスク地方代表者会議というのが昭和二十二年秋頃、開催されて、私の収容所からも若林茂雄君（栃木県）と二人で雪の積もった線路づたいに歩きコムソモリスク駅の手前から左へ折れ四分所へ向かった。

受講生も講師も知らない人ばかりで恐らく自己紹介もした筈だが記憶に残る名前を挙げることはできないが高原という姓だけは覚えていた。私の記憶が間違っていないければ当時は三十七、八歳に見えて背が高くスマートな方で言葉遣いの丁寧な方でした。一人ずんぐりした方もいたがほとんどの講師が上品で親切な態度で思想家とか党の活動家タイプの人はおらなかった記憶が多い。講習科目は唯物弁証法、資本論、ソビエト同盟共産党史、レーニン主義の問題、天皇制、殖民地論（政

策)など十五科目があつて当時はよく判つたような気がしていたが、特に初めて聴いた「殖民地政策」が耳新しく感動したことだけは今でもよく覚えていゝる。コムソモリスク・ハバロフスク地方では講習会(一カ月と三カ月間の二種)とか民主主義者代表者会議と言つて、各分所から二人ないし三人参加していたように思われるが、イルクーツクやタイシェツト地区では政治学校と呼ばれていたと昭和五十年代後半になつて初めて知つた。昭和二十二年の秋頃、一回目約三週間位の講習のときは、はるかかなたのタシケント・アングレン・アルマータ・カラカンダなど中央アジアからコムソモリスクまで講習会に参加してくれた。なかでもアルマータから来た男はアルマータとは『りんごの町』という意味で、キャベツやじゃがいもしかできないコムソモリスクと異なり、キュウリ、トマト、水瓜、果物類、タバコなどあらゆる品物ができるスバラシイところだと自慢していた顔が目につぶ。講習は五十分で休憩が十分位か、昼休

みや午後は革命歌をよく歌つた。私は夜に弱いのに夕食後は昼間の受講科目の復習の意味で討論会に入るが、毎晩眠くて眠くて仕様がなかつたが、幸いにして一度も吊し上げられたり反省を求められたりした失態がなかつた。五分所から一緒に行つた若林君か恩田君も多分、同じ班で受講したと思う。しかし、講師の方は六、七人おられたが、二十七、八歳から三十代後半位の年齢であり、革命家には見えなかつた。

秋とは言え、シベリアの十月はもう涼しい。十一月になれば寒い。寒い戸外の重労働を毎日続けてゆくことはそれだけ毎日毎日が体力の消耗に繋がつていき、やがて死が待っている時、戸外の重労働を休み暖房の効いた室内で勉強できるとは最高の幸せと生命の保存につながると感謝した。一体誰の指示で講習に参加させられたのか今でも判らない。講習から分所へ帰つて間もなく収容所内の民主委員会の委員の選挙があるから出ると言われた。これも誰から言われたかも分からない。折

角、講習会から帰ったばかりで張り切って？はいたが戸惑った。生来口下手で演説などあまりしたこともないし、選挙なども一度も立候補もしたことはないで弱っていた。それは昭和二十三年二月下旬だったと思う。帰所してすぐ分所内の将校ラーゲリの人定調査をペトロフさんとしたのが二月中旬だと思うから三月の初めに選挙が初めて実施されたのだが、選挙は定員五人で立候補者は五人と既に決められていて立候補すれば必ず当選するような面白い選挙であった。五人の当選者が互選で民主委員会の役割分担というか担当を決めねばならぬ、まず委員長には若くて口が達者でしっかりした山形県立川町狩川出身の好青年で私と同年の安藤光男君でした。彼は入隊前は代用教員で小学校の先生をしていたが字はとでもユニークで分かりにくかった。しかし組織力と統率力はあった。文化委員には矢部信壽さん、東京在住で化粧品メーカー資生堂の花椿という顧客用の宣伝雑誌の編集を戦前・戦後と十年以上のベテランの方で当時

三十歳位。宣伝委員には立神軍曹、東北出身者で羅南山砲の優秀な下士官で温厚な方だった。青年委員には年齢から言えば山本がなるべきだが山本は所内の作業本部では仕事をしていて関係で作業（管内・外）の担当の作業委員となり、窪田五郎氏が青年委員となり、三月四日頃発足して、帰国ムードがどことなく流れて、メーデーを二カ月後に控えて生産競争にコムソモリス地区一位を指して所内一同、この時には一時、千六百人もいた五分所でしたが七百五十人の少数に減員していた。昭和二十年十一月から昭和二十一年三月の五カ月間に四百人死亡、三百人以上の病人が入院し交替要員も入所したが昭和二十二年に五十人帰国して、日本人将校はいつの間にか、第三、第六分所へ転出されて分所は元気な者ばかりで作業意欲旺盛で、生産競争第一位を確実なものにするため、^{こゝろ}団結と帰国イコールの空気は早春のシベリアに
研^{こゝろ}した。

こゝろで再び、一年半前に戻らせて頂く。昭和二

十一年十月、営外作業から営内の作業本部の計算係になったとき、二十年十一月から二十一年十月までの間、伐採以外の主力作業場第四カントーラ、通称赤煉瓦四階建アパート建築現場へ急に行けなくなった。この現場監督のアンドレイさん、自分が二十歳位の時五十歳に見えた白い髭を生やしたズングリしたやさしいお爺さんに断りもなく休んで分所内に三カ月ばかりしてから所用のため、このカントーラを訪ねたとき、私を見つけたアンドレイ爺さんは飛んで来て私を抱きしめて涙声で「どこへ行っていたのか、お前が急に来なくなつて心配していたのだ、他の者に聞いても分からないうし帰国した話もない（冬季だから）のに一体どうしていたのか」と半分怒つたように、半分泣き顔で問い詰められたので「アンドレイさん自分は去年の秋からウチヨウチク（計算係）になって、外へ出られなくなつたんよ」申しましたら、自分の右手の親指をピンと立てて「ヤマモト・モロジエイツ・ヤマモトモロジエイツ」と言つて喜んだ。

その時はモロジエイツという単語は分からなかったが雰囲気で何となく分かった。あとで聞くとモロジエイツとは「うい奴」とか「でかしたぞ」とか感心して誉めたたえる感動詞らしい。申し訳ないことに昭和二十三年五月十日五分所を出てナホトカへ向かうとき挨拶もせず帰国した事を恥ず。昭和二十二年一月のある朝、午前八時の作業呼集に二大隊の弱兵班が出てこない。出発を控えて誰も現われないので急いで兵舎に入ると、十五・六人がごたごたもめている。班長らしい男に尋ねると、この男が体調が悪いから今日はよう作業に行けないと言うので困つていふ。時間がないうし今日は休みの日に当たつていふ人に、代りに出てくれ明日休まずから交替してくれ、と頼んで了解してくれてことなきを得た。朝の一番忙しい時に飛んだハプニングだった。数日して所内を歩いていると一人の弱そうな兵隊がやって来て、いきなり「山本さん、貴方は松商（愛媛県立松山商業学校）ではないですか」と。学校を卒業して

四年以上経って、しかも北緯五二度のこのコムソ
モリスクの一角で「松商」とはなんとつかしい
言葉に呆気に取られた。瞬間「松商がどうしたの」
と問うと「私は松商時代バスケット部であなたと
同級の川上哲生君、胡田君、井上視朗君らを知っ
ている」と言われて先日の札を言われた。あ
の広いシベリアで松商の先輩に会うとは……。

昭和二十三年五月一日、シベリアにも好天気の
春がやって来た。アムール河の厚い氷も夜も昼も
ドカッ!! ドカッ!! 大きな音を出して氷が割
れてゆく。もうすぐ流水となり北上し再び満々た
るアムール河に戻る、待望久しく、五月一日、メ
ーデーを迎えた。生産競争の期限が来た。五分所
がこの年、一番に帰国することができたのは作業
成績が良かったからだ。

分所員七百五十人の内三十人程が残務整理要員
として後日帰国することになり、収容所勤務のロ
シア側将校と共に当分一〜二カ月残ることになっ
た。五月八日出発の七百人は服装も整え、少数の

地元民のドスビダーニアの声に送られて新緑の美
しい、美しいシベリア大陸を南下した。昭和二十
年十月初めにはクラスキーから七日位かかってコ
ムソモリスクへ着いた。初夏の五月十日朝六時に
ナホトカに着いた。初夏のナホトカは美しかった。
夢にまで見た日本海、潮の香りを胸いっぱい吸っ
て深呼吸、こんな気分は久しぶりに梯団員全員貨
車から下車、帰国のための収容所へ入った。五月
八日にコムソモリスクを出た帰国列車は他分所か
ら兵士とちようど千人で出発したがハバロフスク
駅にてG・P・Uの指示で一〜二人下車させたら
しいという噂も聞いた。

十日朝、我々がナホトカへ着いた六時頃から十
分ないし十五分置きに後続列車が入ってくる。一
列車の梯団は千人で十本列車が入れば一万人。十
時頃に三収容所も満員、海岸の砂浜も人、人であ
ふれた。それでも列車はどんどん入ってくる。僅
か五時間か六時間の間にナホトカ港はいっぱいにな
り、午後から到着した列車はいずれも二〜三十

分停車していたがバックでスーチャンやウオロー
シローフの方へ後退した。噂によれば昨日、日本
から迎えの船が二隻入って昨年から待機していた
兵士が全部帰国したらしい。道理で私たちが朝一
番に到着した時はどこを見ても日本人が一人も見
当たらない。私たちの列車が八月十日に一番に入
り、初めての列車だったようである。帰国者のた
めには当然ナホトカ勤務の要員が必要である、七
時か八時頃、私は元の五分所の所長ナーギンと
G・P・Uのエグナチックさん、ペトロフさんに
呼ばれた。「ヤマモト、昨日の船で日本人が全部帰
ってしまつて、世話をするものが誰もいないのだ、
炊事要員と被服庫関係、糧秣倉庫関係にどうして
も最低三十人は必要なのだ、ヤマモト、すまぬが
残つてやつてくれぬか」と頼まれた。私もすぐに
承諾した。民主委員の二十代の年齢は三人、安藤
委員長はコムソモリスクへ残された。あとはヤマ
モトと若林の二人。委員以外は青年行動隊の若手、
二十三歳、二十四歳の者、二十八人がサツと手を

上げてくれて、ちょうど三十人、ナホトカに留ま
つて帰国者の面倒を見ることになる。この三十人
は収容所内で帰国者の行動を見るアクチーブとは
違い、収容所外にある糧秣、被服関係と炊事だけ
目的としたものである。炊事班長は重砲第三連隊
の炊事班長であり、コムソモリスク第五分所の炊
事班長の白井伝五郎軍曹である。白井軍曹は東京
都出身で、炊事班長として超ベテランである。コ
ムソモリスク時代にも抜擢されてハバロフスク州
十八地区の炊事の指導顧問としてウプラブレイニ
ヤ（総本部）へ勤務した経験もあり、その協力者
として三重県の森川長成氏が『平和の礎』十三号
に詳しく載っておりますのでご参照下さい。五分
所の炊事設立の苦勞話があります。

私たちは五月十日から一年位は残るつもりでし
たがロシア側はそれは気の毒と思つたのかちよう
ど三カ月、八月十二日に帰国することができまし
た。ナホトカに勤務中の六月上旬か同志の若林君
とナホトカの町を何気なく散歩していると、向こ

うの方から「ヤモマータ・ヤモマータ」と聞き馴れた声があるではありませんか。四十メートル位離れていた有刺鉄線に囲まれた収容所の中にコムソモリスク五分所の将校連中と家族がいるではありませんか。所長も副所長もイグナチックさんもニコライさんも一番親しくしていたペトロフさんも皆いる。ニコニコはしていない。疲れた淋しそうな顔をしている。私と若林君はビツクリして驚いた。コレは何か事情があるなど、今まで収容所に入れられていて自由に町を歩ける私たちと、鉄条網の中の収容所の中にいる人々、いくらドイツの捕虜になった時期があつたとは言え、あまりにも変われば変わるものかと、近付いて聞けば一両日、食事らしい食事もしていないと。「山本、パンと缶詰くれないか」と何という言葉。過去二年ばかりシベリアでお世話になったロシアの将校に御礼をできるのは今より外にはないと、「若林君、私がお世話になった人だ、協力たのむと」「わかつとる」と一言。「ペトロフさん、では今は三時、日暮

時刻の六時半頃こゝへ来るから」と。糧秣倉庫へ返りドンゴロス（麻袋）の一つには黒パンを十二本、今一つの袋には魚や肉の缶詰三十個を入れ、二人で再び夕方行き無事渡すことができた。危ない橋を渡ったが胸中は安堵した気持であつた。翌日昼、訪ねると昨日の礼を言われ、腕時計を一個頼むと言われ、何とかしてみます、では明日と別れた。先にも書きましたが私たちは一度も引揚者の収容所へ入ったことがなかったが、第一か第二の収容所の中で日本人の時計屋さんが二人居てロシア人の時計を修理している場所があるとかねてから聞いていた。私は初対面の小柄な中年の時計屋さんに委細を話して腕時計一個の寄贈を頼んだところ気持良く協力して下さり、一番良いのを持って行きなさいと好意ある態度で頂き、自分もほのぼのとした気持ちで、翌日ペトロフさんに差し上げた。「どうせ日本兵が所持していた時計です、どうぞ使つて下さい」ペトロフさんの手に固く握りしめて貰った。それから一、二日して収容所を

のぞくと誰も人影は無く夜の船でマガダンへ収容所関係の家族ら全員が出発したあとだった。後年、いまでもやさしかったペトロフさんに会いたかったが、マガダンまでは。

昭和二十二年の春頃、ペトロフさんに「山本は元気で、日本には若い両親と弟妹も元気だから、日本人の体の弱い人、老人を先に帰らして山本を最後に帰らしてくれ」と頼んだ時、「駄目だ山本、パパやママに心配かけていけない、早く帰るんだ」と。その時彼は「山本、コムソモリスクは寒い所だけでもシベリアにはもつと寒いところがあるんだよ。マガダンという港、コルマという金鉱があるがこゝへ行った人は再び生きてこゝを出ることはできないと。山本らはこゝシベリアにはそんなに永くはない。一、二年の内にはきつとパパ、ママの居る東京（日本のこと）へ帰れると。しかし我々ロシア人将校、収容所関係の職員は生涯ヨーロッパ、モスクワへは帰れないのだ」と。なおペトロフさんの家庭は名門の貴族らしく、学校も

最高学府を出ていたらしい。ペトロフさん、私を助けてくれたG・P・Uのイグナチックさん、有難う、アンドレイさん安らかに眠って下さい。

シベリアで仆れた戦友よ安らかに眠れ 合掌

【執筆者の紹介】

出生年月 大正十四年九月二十四日 干支 丑年

本籍 愛媛県松山市千舟町

現住所 松山市水泥町

最終学歴 愛媛県立松山商業学校

職歴 日本電気株式会社 総務部指導課

東急百貨店東横店 紳士服課

自営業 紳士服誂え

軍歴 重砲兵第三連隊一大隊本部

(通称) 満州第一二一五部隊

現在 財団法人 全国強制抑留者協会監事

愛媛県支部長

愛媛県シベリアを語る会会長

山本繁夫君を語る

山本繁夫君と私は、同じ小学校で育った。私の方が一つ年上であったが、家が近かったので、人懐こい、活発な少年であったことを憶えている。

私は昭和十二年に松山商業学校に入學したが、三年生になる時、肋膜炎のため休學し、復學後は山本君と同学の徒として過ごすこととなった。彼とクラスを共にすることはなかったが、成績も優秀であったばかりでなく、山岳部やグライダー部で体力と忍耐力を養い、卒業後は日本電氣の難関を突破して、人事、教育関係の重責をになつていた。

昭和十九年も押し詰まった頃、彼から一通のがきが来た。彼も私と同じく関東軍一二一五部隊に入隊する赤紙を受け取ったというのである。竹馬の友からこんどは戦友になったわけである。集合したのは博多、昭和二十年の二月、私達は敗戦間近かの日本とも知らず、勇躍、満州下城子の兵営に入隊した。私たちは、フ隊（第二中隊）所属の砲手、中隊長は前総理、近衛文麿公の長男、文

隆殿である。私は、満州の虎の子部隊と言われる重砲兵よりも中隊長に名譽を感じ、また学徒兵であったためか、非常な恩恵をうけていた。一方、山本君は第一大隊本部付となり、それぞれに新兵教育を受けたが、結局彼が復員するまで顔を合わせることはなかった。ただ、凶們の陣地構築中に幹候の試験があり、三人に一人も合格しなかった。厳しい選別の中で、山本君がトップにその名を讀み上げられたことを明確に憶えている。

彼が故国の土を踏んだのは、私より遅れること一年半の後であった。私たちは互いの生存を喜び合ったのは勿論であるが、苛酷なシベリアの話はあまりしなかったように思う。ただ、私が弱体の故に却って極寒のシベリアから守られ、栄養失調でダモイが速かったのに対し、彼の場合は、その体力、知力、責任感、経歴などからみて、既にソ連は調べていたのではないかとも思うが、彼の話では露助のカピタンが彼に目をつけ、彼を引き上げて遂にはハバロフスク地方講習会で徹底的な教

育を受けたと聴いている。いずれにしても、最終的にラーゲリの最高責任者となり、細心の心遣いをして日本兵を元気にダモイすることに腐心したと云っている。そして、いよいよナホトカからダモイする直前にも拘らず、ロシア側の手違いか日本兵の使役がなく、次々と集まるダモイ兵の世話役を急遽募集した時、彼は親しい露助の助言を拒んで自らその役を引き受け、三カ月も自分のダモイを遅らせたと話している。

とにかく、彼の復員後、私は会社人間として松山を離れ、彼も一時東京に行くなどして三十数年これといった交流はなく時は流れたが、昭和五十四年の初め、山本君から一通の案内状が届けられ、我々重砲兵三連隊の新兵（四国出身）戦友会に出席して欲しいということであった。彼が仕事の合間を縫って、とうの昔に忘れていた同年兵の死亡と生存を調べ、四国全域の名簿を作って檄を飛ばしたのである。山本君の行動力と意志の強さを今更のごとく知った次第であるが、かくして彼

との仲は、単なる竹馬の友から学友となり、戦友となり、さらに戦後三十年以上も経て思わぬ方向に嵌め込まれてゆくことになったのである。

平成七年の九月であった。突然彼が訪ねて来て、「シベリアの抑留絵画・慰霊墓参写真展」を松山で開催したいというのである。その成算はあると彼は云うが、いずれも口約束の域を出ず、無謀この上ない気もしたが、その趣旨に反対する理由もなく、彼の熱心にほだされて遂に一臂の力を貸す破目になってしまったのである。

その当時、シベリア抑留関係で活動している組織体は他にもあったが、彼は独自に、純粹な慰霊だけの思いを持って行動を起こしたもので、初期の段階では絶望の状態にまであつたこともあつた。がそのとき、彼はその不屈の闘志をもって愛媛新聞社に掛けあつた結果、その協力を得て俄然同行の士が集められ、平成八年八月、松山のNHKホールにおいて無事に開催の運びとなつたのである。

そのあと、盛り上がった気運を絶やすことのないよう、「愛媛シベリアを語る会」へと拡大し、同時に、全国強制抑留者協会、愛媛県支部を結成、山本君が支部長となって今日に到っている。また、この支部においては、全抑協の絶大な協力のもと、支部ならびに「語る会」全員が一丸となって「シベリア抑留犠牲者の碑」建設に立ち上がり、翌平成九年十二月、松山は城の北、御幸の山の麓なる万葉の苑にその素晴らしい姿を見せたのである。この碑の御前においては、加戸知事をはじめ、幾多の知名人、遺族、抑留体験者らの参列を得て、盛大な慰霊祭が毎春行われている。

山本繁夫君は、平成二年の財団全抑協第一回目のシベリア慰霊訪問に行ったとき、凍土の地に無念の死を遂げた戦友の不思議な叫びを霊感し、それが彼の祈りとなって無一物、無組織の中から立ち上がったのであるが、不思議な幸運のとりなしから、多くの強力な賛同と無私の協力者を得て、今日の大をなし遂げた形となっている。これは多

大の人々の協力を得てなつたとは云え、その事業の始まりから展開の状況をつぶさに見て来た友人の一人として、はっきり云えることは、彼、山本繁夫君が居なければ、恐らく誰もこれらの諸事業はやっていないだろうということである。

以上

(愛媛県 三好清一)